

【研究ノート】

# レジリエンスを基盤としたソーシャルワーク実践理論の検討に向けたレジリエンスの概念枠組みの整理

Addressing the point of Conceptual Framework of Resilience toward discussing Social Work Practice Theory based on Resilience

朝岡 健吾（北星学園大学大学院 社会福祉学研究科 博士後期課程）

## 要旨

レジリエンスの概念枠組みはいわゆる「実践理論」ではないが、関係性の質に着目した包括的な概念であり一般システム理論を取り入れながら発展してきた。レジリエンスは「逆境からの回復」を意味すると言われてきた。しかし、近年の研究で生態学理論や社会生態学理論を基盤とした「社会生態レジリエンス」の関心が高まってきた。本研究では、一般システム理論、生態学、社会生態学を基盤としたレジリエンス研究についての文献を収集して、社会構造上の問題を引き起こす社会関係の矛盾や力の不均衡をも包括した社会生態レジリエンスの概念枠組みを整理したい。

キーワード：「レジリエンス」「システム理論」「社会生態学」

## I はじめに

人々が抱える困難は多くの場合、彼らを取り巻く現在または過去のあらゆる関係性が複雑に影響していると考えられる。1対1の対人関係の集合体が網目のように張り巡らされているような形でネットワークが形成されており、人々はそのようなネットワーク上の相互的、互恵的な関係性において平衡感覚を保ちながら生きているからである。人々が行動を起こす動機は彼らの置かれている社会的な関係性の中に存在しており、例えば、感情（痛み、不安、悲しみ、愛、喜び等）は人々が経験することのほんの一部を表すが、そのような感情や行動を引き起こすのは彼らの内的な部分のみならず社会環境上のあらゆる関係性に対する彼らの反応、いわゆる力動的な相互作用である(Lappin 1988 : 222)。

レジリエンスという概念は個人に備わった特

性というよりはむしろ社会的、相互関係的なものであり、それは他者との関係性の中から発生するため、広範囲の集団（例：家族、地域など）で観察可能な特質である(Gilligan 2017 : 446)。それは困難な状況下に置かれていても、平衡状態を保ちつつ、環境に適応することができるということを意味する。Masten(2018)もレジリエンスを「システムとしての順応能力」として定義づけている。

レジリエンスの概念枠組みはいわゆる「実践理論」ではないが関係性の質に着目した包括的な概念である。海外、特に米国ではレジリエンスに関する研究は1950年前後から行われていた。Masten(2001)によればレジリエンスの研究が始まったころは困難を乗り越えるための個人の非凡な特性や強さ、タフさについての研究に焦点が置かれていた。その当時から戦争や貧困、病気、家庭内不和、その他の様々な逆境といえ

る環境に置かれていても、学業面で良い成績を収めて、短期間で仕事を替えることなく定職に就くことができ、幸せな家庭を築くことができる人たちがいる程度存在することは知られていたが、彼らの持つ特性や能力がどのようにして逆境を克服させたのかということが当時の研究者たちの重要な研究テーマであった(Masten 2001)。その頃のレジリエンスについて学者たちやマスメディアは、「打たれ強い」「傷つきにくい」と表現していたため、一般的にレジリエントな子どもたちは非凡で特別な才能があると信じられていた。

レジリエンスについて、Werner(1989)はアメリカ・ハワイ州で長期的な調査研究を実施している。その中で、1955年生まれの545名のハワイ州生まれの子どもたちを約30年に渡り追跡し、生物的、心理的、社会的に分類されたリスク要因及び保護的要因がもたらす影響について調査を行った。その中で約72名が貧困、母親の低学歴、両親の離婚等による困難にも関わらず、優秀で自信を持ち他者に思いやりを持つことができる大人に成長していた。彼らに共通して見られた保護的要因は個人の性格に起因する特性（例えば、社会性、平均的な知的能力、コミュニケーション能力）、両親、兄弟、配偶者等による精神的な支えに見られる家族関係、学校、職場、教会等の個人の能力形成や意思決定に影響を与える社会的な関係である。

その後、数多くの研究者たちがレジリエンスについて関心を持ち始めることでレジリエンス研究に新たな進展が見られるようになった。そうして、レジリエンスの概念が見直されていく過程の中で、初期のレジリエンスのイメージによって「生まれつき備わっている自己規律の能力を如何なく発揮すること」や「困難な状況下においても他者の助けを借りずに自立して立ち向かう」ということについて、人々が過度に賞賛してしまう傾向があることがわかった(Walsh 2016: 6)。しかし、それは個人の能力を

超えた何らかの社会環境に起因する阻害要因のために、逆境を乗り越えることのできない人々を弱く、力量不足というレッテルを貼ることで無力な存在だと偏見を持って見下すことにもつながっていた。

Masten(2015)やWalsh(2016: 6)はレジリエンスを個人の強さ、タフさなどといった個人の特性と定義づけることで、自力で逆境を克服できない人々を努力不足や能力不足などと責めることは避けるべきだと強調している。個人の能力を超えた社会環境による要因の影響を過小評価してしまうからである。一般的に「レジリエントな人々は生まれながらにして備わった特殊な才能や強い精神力により極度に困難な環境下に置かれていても生き延びることができる」と考えられているが、レジリエンスという現象は社会環境の影響を受けることなく個人の生まれ持った才能や特性のみによって引き起こされるものではない。

レジリエンスに関連する要素は個人の内面だけではなく私たちが生活している社会環境にも点在することがわかっている。例えば、家族、友人、地域の人々との良好な関係性もレジリエンスを促進する要因となりえる。レジリエンスとは決して特異なものではなく一般的な適応過程を通じて現れる日常的にありふれた現象であり、何らかの特別な才能、子育て方法、幸運などが子どもの良好な発達や逆境の克服に重要な役割を果たしているわけではない(Masten 2001)。また、レジリエンスとは人々と社会環境の間で長い時間をかけて構築された相互的、互惠的な関係性の中で出現する力動的な現象ともいえる(Fraser, Richman, and Galinsky 1999; Pangallo, Lewis, and Flaxman 2015)。言い換えると、人々が関わる社会環境に存在するすべての生物的、心理的、社会的、そしてその他の環境的な要因による相互作用がレジリエンスの出現に影響を与えている(Fraser Richman, and Galinsky 1999; Greene 2003)。つまり、精神面

での変化や成長、家族や友人など周囲との関係性といった要因が密接に関わりあう過程の中でレジリエンスが出現することが明らかとなっている。

## II 先行研究の到達点とそれを踏まえた研究課題

国内において「個人の内面的な適応能力」や「生まれ持った特性」と定義づけられたレジリエンス研究は、心理学や教育学の研究者たちの間で数多く取り組まれてきた(鈴木ほか 2015, 徳永 2017, 尾野 2017, 涌水 2020)。国内におけるレジリエンス研究の多くは、尺度を用いて多岐にわたる場面やその対象者の性格特性といった個人内資源やソーシャルサポートに代表される環境資源を測定するものである(井隼 2017)。

一方、Windle(2010)は 271 に及ぶレジリエンスの概念研究を分析した結果、レジリエンスとはストレスやトラウマを引き起こす重要な要因と交渉し、適応できるように働きかけ、適切に管理していく過程であると結論付けた。Masten(2018)もレジリエンスの概念は生態学理論(Bronfenbrenner 1979)、システム理論(von Bertalanffy 1968)、家族理論(Walsh 2016)などを取り入れつつ、「困難から立ち直るための個人の資質」から「困難に直面しても適切に適応できるシステムとして順応していく過程」と移行したことを整理づけている。

人と社会環境との相互作用の過程においてレジリエンスは出現する。しかしながら、その過程に重大な影響を及ぼすであろう個人の力の及ばない社会構造上の問題は生態学理論上の「マクロシステム」に位置付けられてはいるものの、その問題がどのような働きを持つかについては先行研究において明確にされていない。社会構造上の問題は、例えば、生まれつき備わった障がいや疾病に対する偏見や理解不足、格差社会

において生じるであろう機会の不平等、社会的弱者と言われる人々に対する救済制度の不備等があると推測される。

レジリエンスは逆境を生き抜く過程において出現するが、自分の力で環境を変えることが難しい人々、特に子どもたちが、そもそも、なぜそのような環境におかれなければならないか、レジリエントになるために高い能力、才能、適応力を求められるのか疑問に持つ必要があるのではないだろうか。一見レジリエントに見える逆境を経験した子どもたちは常に彼ら自身の個人的、文化的な強みや能力を完全に超えた社会構造上の圧力を経験している(Davis 2014)。そのため、個人の能力や特性に基づいたレジリエンスのみに焦点を置いて支援するのではなく、彼らがなぜその環境に置かれ困難に向き合わなければならないのかといった背景を認識する必要がある。Masten(2018)も個人や家族システムを取り巻くコミュニティ、文化、社会のあり方というのがレジリエンスの潜在的な可能性を秘めているとし、将来的に取り組むべき研究課題であると述べている。

## III ソーシャルワークにおけるレジリエンス概念の先行研究

このように、レジリエンスの概念は先行研究において一般システム理論や生態学理論などを取り入れていることがわかっているが、ソーシャルワークも人と社会環境との相互作用に焦点を置いていることから、それらの理論の影響を強く受けていると言える(Andreae 1996 ; Gitterman and Germain 2008)。

ソーシャルワークに一般システム理論が取り入れられたことにより、社会現象はシステム間の相互作用の結果によるものと理解された(Greene 2008 : 165)。それにより、ソーシャルワークの実践者達は特定の行動は特定の環境によってのみ引き起こされるといった 2 者の単純

な因果関係から、人々と社会環境は相互作用を繰り返す一体的なものであると認識するようになった(Andreae 1996 : 605). さらに、生態学理論を取り入れることで、両親、親戚、友人等との関係性は状況により保護的要因にもリスク要因にもなりうるが、保護的に作用すれば良好な適応を促進し、リスク要因となれば関係性の不調和につながるということがわかった(Gilgun 1996b).

レジリエンスの概念は保護的要因とリスク要因を明確なものにした。ソーシャルワークはレジリエンスの概念を取り入れることで、人々の「強み」や「弱み」をよりの確に識別することができるようになった(Gilgun 1996a). また、ソーシャルワーク理論における先行概念でもあるエンパワメントやストレングスの過程をより論理的に説明することができるようになった(Corcoran and Nichols-Casebolts 2004). さらに、人々が抱える問題は複雑な過程の中で生じることを認識したことで包括的なアセスメントの実施が可能となった(Begun 1993). ソーシャルワーク実践者達が個人の特性や環境要因をより踏まえることができるようになることで、予防的なソーシャルワーク実践を展開できるようになった(Greene 2008 : 11).

#### IV 社会生態レジリエンスの概念枠組みの整理に向けて

一方で、自然環境における生態系システムにおいて予測不可能な出来事や攪乱に対して適切に対応し、必要に応じて変容していく社会生態システムを基盤としたレジリエンスの概念研究は環境学の領域において一定の蓄積が見られている(Holling 1973 ; Folke 2006 ; Cumming 2011). ここでいう「社会生態レジリエンス」とは予測不能な出来事や攪乱に反応する際に変化に適応し、必要に応じて変容することができる社会生態システムとしての能力(Folke, Biggs, and Norstrom et al 2016)のことをいう。この社

会生態レジリエンスの概念は文化的多様性を持った人々の逆境に対する適応性を理解するための研究に用いられ始められたことで、ソーシャルワークなど社会科学領域の研究者たちの間で関心が高まることとなった(Ungar 2008 ; Ungar 2018 ; Ungar 2021).

社会生態レジリエンスは社会と生態系の関係性の質に着目した概念であることから、レジリエンスを促進する人と社会環境との相互作用とそれに影響を与える社会的要因を明確にするための手掛かりとなり得る。レジリエンスは、ソーシャルワークと同様に、生理的(Biological)、心理的(Psychological)、社会環境的(Social-Environmental)、精神的(Spiritual)といったあらゆるレベルのシステムで展開される相互作用に重要な影響力を持つことがすでにわかっている(Greene 2003 : 78 ; Saleebey 2009 : 299). Ungar(2021 : 2)も社会生態の概念枠組みを用いることでソーシャルワークは個人と社会環境との間の相互関係に影響を与えるあらゆるシステムを取り扱うための支援方法を明確にできると述べていることから、ソーシャルワークの文脈において社会生態レジリエンスの概念は重要なものになると考えられる。

#### V 方法

レジリエンスに関する先行研究において、適応過程やシステム間の関係性が論じられてきた。それらを踏まえ本研究では、レジリエンスの促進過程における「システム」の性質や関係性について整理しつつ、社会構造上の問題を引き起こす社会関係の矛盾や力の不均衡をも包括した社会生態レジリエンスの概念枠組みを整理することを試みたい。

そのために、北星学園大学図書館 HOLLY 検索, Academic Search Complete, APA PsycInfo, SocIndex with Full Text, Social Sciences Full Text, Social Work Abstracts, Sage Journals

Online」といったデータベースを活用して、レジリエンスの著名な研究者である「Ann Masten」、Michael Ungar」、また「Resilience」をキーワードとして検索を行った。その中でPDFファイルにてダウンロード可能、また北星学園大学図書館に所蔵している文献を用いて概念の整理を行った。

## VI レジリエンスに関する研究の蓄積

リスクのある状況や逆境に直面しても負けずに生き抜くことができる人々は、困難な状況に飲み込まれ破壊的な行動に身をゆだねてしまう人々と比較してどんな特性を発揮しているのか。心理学の研究者たちによるレジリエンス研究の第一のうねりはこの質問に対する回答であった(Richardson 2002)。研究者たちは人々を戦争体験、疾病、貧困などの逆境から乗り越えさせる個人としての特性や環境的要因を探し出した。その中で、彼らはレジリエンスという現象、リスク要因、そして人々が環境に適切に適応するための個人的な資質、対人関係及び環境の性質についての基本的理解を得ようとしていた(Masten & Cicchetti 2016 : 274)。また、変数に焦点を置いた Valuable Focused Research (量的研究方法) が良好な適応に寄与する観察や測定が可能な特性を探し出すために改良されたこと(Greene 2008 : 315)、優れた個人的資質や能力、資産、保護的要因(例:自尊心、自己効力感、サポートシステム)により人々は逆境下であっても成長していくことができることがわかった(Richardson 2002)。これらには逆境に直面したときに攪乱状態に陥ることを予防する役割があるとされる。また、これらはリスク要因を低減し肯定的な特性(例:社交性、問題解決能力、自律心、未来志向な考え方)を促進することを目的とした専門的な介入方法を生み出すために用いられた(Greene 2007 : 28)。

第二のうねりでは、研究者たちはストレスそ

のものやストレスへ対処していく過程について研究するために、特別な状況下に置かれた人々に焦点を置いた Person Focused Research (質的研究方法)を用いた調査を行った(Greene 2007:28 ; Greene 2008 : 315)。これらの研究は、人々はどのような過程においてレジリエントな特性を獲得したのかという問いに回答するためのものであった(Masten and Cicchetti 2016 : 274 ; Richardson 2002)。また、専門家の臨床的介入を受けている状況や特定の保護的過程の効果を検証するために、ある特定の場面での支援(例:効果的養育、適切な助言、自己規制等)を評価することで順応性に基づいたレジリエンスの過程が研究された(Masten and Cicchetti 2016 : 274)。レジリエンスを促進する主な過程を研究していく中で、レジリエンスとは個人に備わった特性というよりもストレス、逆境、変化に対処していく過程そのものであり、また保護的要因を取り込み、それらをより充実させる機会でもあることがわかった(Richardson 2002)。

第三のうねりでは、研究者たちは逆境的な出来事を通じて人々がどのようにして成長し生まれ変わっていくのかといった過程を明らかにすることを通じてレジリエンス要因(Greene 2007 : 28)やレジリエンスの概念(Richardson 2002)についての研究に取り組んだ。この段階での研究は攪乱状態を経て個人の内面がレジリエント的に再統合されるための気力や動機の根拠にはどのようなものがあり、どのような環境下でそれは顕著に表れるのかという問いに回答するために行われた(Richardson 2002)。また、困難を乗り越えた経験が個人の内面をどのように変化させたのかについての研究が行われた。これらの研究が進められるにつれて、生活上の混乱から個人の内面がレジリエント的に再統合していく過程が明確化され、知恵、自己実現、利他主義といったものが個人の精神的な強さを育む原動力(モチベーション)となり、それがリ

ジリエンスであることがわかった(Richardson 2002).

現在のレジリエンスの科学の広がりには個人や環境といった複数レベルの「システム」におけるレジリエンスの促進過程と複数「システム」の間におけるレジリエンスに関する理論や知識の統合に大きな焦点を置いている。これが第四のうねりである。生涯にわたる人間の発達に関する発達システム理論の影響や研究方法についての理論の発展が第四のうねりの大きな部分を占めている(Masten 2015)。それに加え、科学技術の発達による研究方法の進展により神経生理学、遺伝学、ストレスメカニズムなどの領域においてレジリエンスの研究が行われるようになった。それらの学問領域の統合的な研究を通じ、研究者たちはレジリエンスに関連した家族「システム」の機能及び家族内の個人「システム」が家族「システム」と相互作用していく過程の理解に焦点を置いた(Masten 2018)。次章以降では、「システム」の性質及び関係性について概観しつつ、システム理論及び社会生態理論を基盤としたレジリエンスの概念を整理していく。

## Ⅶ システム理論を基盤としたレジリエンス

逆境を乗り越えるためには個人の資質はあまり関係なく、むしろ両親や友人など周囲の人々からの気遣いや助言などがきっかけとなって置かれている状況に向き合うことができる。社会環境における関係性の質がレジリエンスに影響を与えているからである。それゆえに、レジリエンスとは個人としてではなく「システムとしての順応能力」として位置付けられている(Masten 2018)。

ここでいう「システム」の構造や働きは一般システム理論によって定義づけられており、社会環境に存在するすべてのものに対して「システム」という概念を用いている。そのため、レジリエンスの概念枠組みを検討していくためにここ

で一般システム理論を概観していく。一般システム理論とは物理学や生物学の分野において、ひとつの研究テーマについて部分的なものや分離された過程のみを研究するのではなく、それぞれの部分の力動的な相互作用に着目することで、ある一部分における行動パターンが全体での研究と部分的な研究で見せる違いが組織や秩序の中に生じた問題を解決するために必要であるという考え方から生まれたものである(von Bertalanffy 1968)。

一般システム理論におけるシステムとは「ある環境において相互に関係しあう構成要素の集合体」と定義される(von Bertalanffy 1968 ; Greene 2008b : 166)。「構成要素」とは最も小さいもので原子レベルの粒子や動植物、人間など社会環境に存在するすべてのもののことを指す。これらの構成要素が互いに調和して統合していく過程を通じて全体としてのシステムが形成されていく(Greene 2008 : 171)。システムは外的環境との相互作用の有無によってオープン・システムとクローズド・システムに分類される。

外的環境との相互作用がないクローズド・システムはシステムの維持するために他のシステムからの介入を必要とせず、外的環境からの影響を受けることなく、それ自体で均等にバランスを保つことができる。そのため、他のシステムとの相互作用なしにシステムの平衡状態を保つために外部からのエネルギーや情報を必要としない。しかし、行動を修正して変化に柔軟に対応する能力は比較的劣っている(Greene 2008 : 191)。このシステムに見られる単一の原因のみが単一の結果に結びつく直線的な因果関係(Linear Causality)は結果を予測しやすい反面、あらゆる出来事の因果関係を過度に単純化させることで、それらに対する理解や可能性を限定的なものにしてしまう(Mattaini 2008 : 357)。そのため、システムについて部分的に理解するにとどまり、システム全体や他のシステ

ムとの関係性についての理解を妨げてしまう可能性がある。クローズド・システムの場合、家族構成員以外の者との信頼関係に乏しいために周囲から孤立しがちで家族内で得られる情報をもとに設定されたルールに従うことでのみ平衡状態を保つことができる(Andreae 1996 : 609-611)。この場合は原因と結果が明白なため、彼らの関係性で見られるのは直線的な因果関係である。

対照的に、オープン・システムは外的環境からの継続的なエネルギーや情報などを取り込み、また必要に応じてそれらを外的環境に流出させることを繰り返して、あらゆる構成要素の構築と分解を繰り返す過程を通じて安定した状態(Steady State)を維持することができる(von Bertalanffy 1968 ; Mattaini 2008 : 361)。オープン・システムではシステム間のエネルギーや情報が処理されている過程が複雑だったり、システム外に存在する要素との相互関係により、ひとつの原因から多方面の複数の異なる結果が生じる「多面的結果性」や、多くの異なる原因から生じる多種多様な過程を経ても最終的にたどり着く結果は同じ「等結果性」が見られる(Mattaini 2008 : 362 ; von Bertalanffy 1968)。オープン・システムにおける問題の原因分析の考え方は、あらゆる出来事は「多面的結果性」や「等結果性」に基づいた相互作用としての循環的な因果関係(Circular Causality)である(Mattaini and Lowery 2007 : 34-35)。オープン・システムでは、家族以外の親族や地域の人々との関わりあうことで社会環境との関係を保ちながら状況の変化に対応することができる(Andreae 1996 : 609-611)。この場合の関係性で見られるのは多面的結果性や等結果性である。

あらゆるシステムは境界線(boundaries)により視覚的、概念的に区別される(Mattaini 2008 : 361)。境界線はシステム間の関係性の濃淡を「関係性のもつれ(Enmeshment)」,「関係性からの解放(Disengagement)」という形で表して

いる(Andreae 1996 : 612)。「関係性のもつれ」はシステム同士が過度に結びつき境界線があいまいとなるのである。「関係性からの解放」はシステム間の相互作用が乏しいため、境界線が明確になることである。これらは家族間のコミュニケーションの傾向を健康的、病的などと分類しているわけではなく、社会環境の変化に伴い変容を繰り返す個人間のコミュニケーションの傾向である。境界線はシステム内の構成要素を定義づけるだけではなく、システムそれ自体と境界線の外にあるすべての社会環境を明確に区別することで、システムの機能や特性を明確にする(Andreae 1996 : 612 ; Greene 2008 : 177)。

全体的にみると、これらすべてのシステムはより大きなシステムの下位システムと位置付けられ、より小さなシステムの上位的システムと位置付けられる(Mattaini 2008 : 363)。例えば、家族システムはより大きな地域システムの下位システムであり、より小さな個人システムから見ると上位システムという位置付けである。しかし、実際にはシステム間の上下関係やヒエラルキー構造などは存在しておらず、小さなネットワークの集合体は、より大きなネットワークの中に存在しており、それらは網目のようにピラミッド状に存在している(Capra and Luisi 2014 : 68)。

そのようなシステム理論上、「個人の適応」とは長い年月を経て構築された多様な関係性に影響を受けた家族システムや彼らを取り巻く社会環境など、より大きな社会システムでの相互作用が行われた過程と言える。すべての人々は家族やより大きな上位システム(例、仲間や学校等)に組み込まれており、同じようにそれらのシステムもより大きな上位システム(例：地域社会、市町村、国家等)の中に組み込まれている。個人、家族、地域等は相互に支えあい、補い合い、また影響しあいながら適切な距離感を保つことで、彼らが属するシステムの平衡状態を保っている。

システム理論的なレジリエンスには次の 8 つ (Cicchetti 2016 : 275).  
の原則(表 1 参照)が含まれる(Masten and

表1 : システム理論的なレジリエンスの8つの原則

1	人々の適応と発達（低リスク及び高リスクの環境）は個人の内面や個人とその環境の間におけるあらゆるレベルの機能をまたいだ継続的で相互的な働きかけに起因する.
2	多くの相互的な働きかけのあるシステムはレジリエンスをもたらす過程や人間発達の過程を形作る.
3	適応能力は複数のレベルにて概念化される.
4	困難な状況下での適応能力（レジリエンス）は多くの相互的な働きかけのあるシステム次第である.
5	顕在化したレジリエンスは多くの相互的な働きかけのあるシステムから出現し、幼少期の経験と同じくらい常に現在の状況を反映している.
6	生体系システムはより低レベルの分析から驚くべきまた予測不能で創発的な特質で自己組織化される.
7	レジリエンスは力動的で常に変化している. なぜなら、適応能力をもたらすシステムも発達し変化しているからである.
8	レジリエンス（潜在的、顕在的）はたとえ多くの特性がレジリエンスに影響を与えたとしても特性と解釈されるべきではない.

出典 : (Masten & Cicchetti 2016)

レジリエンスという現象はソーシャルネットワーク上に存在する多様な関係性において長い年月をかけて積み重ねられたあらゆる経験や相互作用の過程を経て出現する(Walsh 2016 : 11). すべてのシステムは相互的で互恵的な関係に基づく多様なネットワークを形成しており、それらは互いに影響しあっている. 同じように、あるシステムが保持しているレジリエンスの変化は、それらに関連しているすべてのシステムのレジリエンスに影響を与える(Masten 2018). レジリエンスとは「単一のシステムが単独で機能することではなく、困難に直面している最中や困難が過ぎ去った後においてシステムやシステムの一部が再び機能することができるよう同一レベルのシステムにおける同時発生的、また

は下位システムや上位システムとの促進された相互作用による結果」である(Ungar 2018). あるシステムがレジリエンスの作用により変容すると、他の関連するシステムにも同時発生的な変容が起こる可能性がある. 例えば、困難な状況への適応は個人が持つ能力かもしれないが、それは個人システムと社会環境上のあらゆるシステムの相互作用の質の影響を受ける. つまり、レジリエンスは「あらゆるシステム間の活発な相互作用の過程」において現れるため、個人としてではなく「システムとしての順応能力」とされるのである(Masten 2018).

## VIII 社会生態理論を基盤とした社会生態レジリエンス

システム理論を基盤としたレジリエンスの概念を整理することで、レジリエンスはシステム間の関係性の質に影響されることがわかった。システム間の関係性を維持し、あらゆるシステムレベルにおいて網目のように張り巡らされている関係性のネットワークへの適応過程は社会生態理論を用いた社会生態レジリエンスの枠組みを用いることで理解できると考えられる。そのため、まず、社会生態レジリエンスの根拠となる生態学理論と社会生態学理論を概観していく。

生態学理論とは（人間を含めた）生物がその置かれている環境においてどのようにして平衡状態を保つことができるかに焦点を当てている学問領域である(Meyer 1988 : 103)。生態学はダーウィンの進化論を基盤としている。進化論において、ダーウィンはすべての生物には共通した祖先がいると仮定した。進化の過程において、生物は親子関係というネットワークを構築することでひとつの家族を形成していった(Capra and Luisi 2014 : 68)。家族ネットワークの形成を繰り返すことで、生物は自分たちの子孫を後世に残すことができる。また、気候変動などの自然環境の変化に直面しても、生物は生き残るために適応する必要があった。結果的に、生き残るために、効果的に環境の変化に適応することができた種が優れた特性や能力を獲得して、次世代に子孫を繁栄させることができた(Capra and Luisi 2014 : 68)。例えば、生物が偶発的な遺伝子の変化により寒冷地を生き抜くために必要な厚手の羽毛を得ることができれば、寒冷地という過酷な環境を生き抜き同様の厚手の羽毛を持った子孫を残すことができるが、そうでない場合は過酷な環境を生き延びることができず子孫を繁栄させることができず絶滅の道をたどるということである(Gitterman and

Germain 2008 : 53)。種の存続という目的のため、親子、家族ネットワークを構築し、自然環境の変化に適応する過程は、人と社会環境における適応過程を理解する手掛かりとなると考えられる。

人を対象とした生態環境はある特定の場面（家庭、学校など）における対人関係や与えられる役割、活動といった **Micro System**(マイクロシステム)、直接的に関わりのある複数のマイクロシステムの相互の関係性といった **Mezo System**(メゾシステム)、直接的に関わることはないが、間接的に影響する **Exso System**(エクソシステム)、さらにこれらのシステムに直接的、間接的に影響を及ぼす価値観や文化的規範といった **Macro System**(マクロシステム)に分類される(Bronfenbrenner 1979)。

Gitterman and Germain(2008 : 53)は生態系システムを物理的環境、社会的環境、文化と位置付けており、それらについて次のように述べている。物理的環境とは「自然世界、人々によって造られた建造物等、それらの建造物の部屋などの空間、生物や環境の周期的なリズムなど」をいう。社会的環境とは「家族、友人、ソーシャルネットワーク、組織、機関、地域などのより大きなグループ（物理的環境にも当てはまる）、政治的、経済的、社会的構造を含んだ社会それ自体のこと」をいう。文化は「環境の一部であり人々の一部でもあり、人々の価値、規範、信条、言語」という形で表現される。

そのような物理的環境、社会的環境や文化を基盤とした複雑で相互依存的なネットワークの中で、人々は平衡状態を保持するための活動を通じて環境へ適応を図っている(Mattaini and Lowery 2007 : 33)。また、相互の関係性を維持し、深めていくことで、社会環境上に存在する全てのものは発展を遂げることができる(Gitterman and Germain 2008 : 53)。また、加齢等の生物学的な変化、期待される役割、置かれている状況の変化によって関係性が変化して

いく生態的移行(Ecological Transition)はあらゆるシステムレベル上、ライフステージ上で見られる(Bronfenbrenner 1979: 26). 本質的な相互依存とは(人間を含めた)生物と彼らを取り巻く社会環境が時間をかけて双方が互いの置かれている状況に順応していくことである(Meyer 1988: 103). 社会環境へ適応するために、あらゆるレベルにおいて関係性を維持することが求められる。

人間を中心とした生態学を研究しているBookchinはネットワークの性質について相互的で互惠的な「コミュニティ」と対照的な人々の力関係に基づいたヒエラルキー構造の影響を受けた「ソサイエティ」に分類している。すべての生物は、その役割や特性に応じて他の生物と相互作用を図り「コミュニティ」上のネットワークを構築している。その関係性は相互的、互惠的である。それに対し、すべての生物の中で人間のみが健康的で文化的な生活の基盤を維持していくため、地域コミュニティ、市町村、国家などといった高度な文明のもとで連帯し相互的、互惠的な関係性の中で社会環境における責任を共有することで制度化されたコミュニティである「ソサイエティ(社会)」を作ることができる(Bookchin 2005: 88-94).

Bookchin(2005: 88-94)によると「ソサイエティ(社会)」に属する人々は特権、権威、権力などに基づいた力による支配と服従による相互的な関係性によるヒエラルキー構造を構築することでソサイエティ(社会)を維持している。

Bookchin(2005: 88-94)はそのようなヒエラルキー構造や力による支配についての人類学を「社会生態学」と定義している。これはいわゆる人間を対象とした生態学で人々の相互的な関係性には個人の能力や特異性を超えた社会的な論理により構築されたヒエラルキー(階級組織)構造に基づいた力関係を基盤としている。ここで言うヒエラルキー構造は貧富の差や職業格差など視覚化された社会状況ではなく、社会状況

それ自体に対する意識や感受性のことであり、政治的、経済的、文化的、伝統的、心理的等の組織化及び制度化された関係性に基づく命令と服従の概念としている(Bookchin 2005: 88-94).

このようにBookchinは「コミュニティ」、「ソサイエティ」の概念を用いることで、人々が作り上げている社会における対人関係の相互作用には、特性や役割に基づいたもの、それに対して、ヒエラルキー構造を基盤とした力関係に基づいたものと明らかにした。

ところで、予測不能な出来事や攪乱に反応する際に変化に適応し、必要に応じて変容することができる社会生態システムとしての能力(Folke, Biggs, and Norstrom et al 2016)である「社会生態レジリエンス」は、生態系の思いがけない変化や環境資源の消失など環境問題が起きる背景について説明するための概念枠組みとして主に環境学関連の分野で用いられてきた。社会生態システムとはレジリエンス、頑健性、持続性、脆弱性といった概念を組み入れた包括的な理論である(Cumming 2011: 8).

Holling(1973; 2004)やWalker and Salt(=2020: 35-43)はシステム論的思考に加えた社会生態の視点からレジリエンスを「変化や攪乱を吸収しつつも基本的な構造と機能(つまりアイデンティティ)を維持する能力」と定義している。また、Cumming(2011: 21)は大小異なる様々な社会生態システム間の関係性を空間的、時間的なものと位置付け、システムのサイズ、構成要素、相互作用といった内的な要因、環境や連結性などの外的要因がシステムとしてのレジリエンスに影響すると述べている。

Walker and Salt(=2020: 35-43)による社会生態レジリエンスの定義には下記の3つの概念がある。

ひとつめの概念は、人々はすべて社会と生態系がつながったシステムに属しており、システムの一方向の領域で変化があると、それが

社会の側か生態系の側のどちらかであろうと、必ずもう一方の領域にフィードバック応答が観測される。そのため、どちらか一方の領域について、もう一方から切り離して理解しようとしても有意義な知見は得られることはないとしている。例えば、経済学、社会学、自然科学などの分野における知見はシステムを構成している要素についてのものでありシステム全体の構造についての知見ではないということである。

次に、ここでいう社会生態システムは複雑な適応過程を持つ。その変化は予測可能でも、線形的でも、段階的でもない。システムは複数の種類のレジーム（安定状態）をとりえる。レジームの種類が変わるとシステムの機能、構造、フィードバックも変わる。衝撃や攪乱が加わると、システムが閾値を超えて別のレジームに移ることがあり不測の事態に見舞われることがある。閾値とは、そこを超えるとシステムの残りの部分へのフィードバックが変化してしまうような制御変数の値であり、いわゆるシステムの転換点のことである。

そして、レジリエンスとはシステムが衝撃を吸収する能力であり変化をこうむりながらも基本的に同じ機能、構造、フィードバック機能を保持することができる能力のことである。言い換えれば、変化をこうむっても閾値を超えずに別のレジームへ移行せずにいられる能力のことをいう。ここでいうレジリエンスとは変化や攪乱を受けた際に「元の状態に戻る速度」のことではなく、「元の状態に戻るができる能力」のことである。

そのうえで、社会生態レジリエンスを文化的多様性のある人々を理解するために用いたUngar(2017)らはレジリエンスを個人やシステムのストレスからの回復という考え方というよ

りも、システム間の相互作用や個人が必要とする資源の質と述べており、「人々が彼ら自身の幸福や健康を維持するための心理的、社会的、文化的、物的資源を探し出すことのできる能力であるとともに、それらが文化的に意味のある方法で提供されるように個別的、集団的に交渉することのできる能力」と定義づけた。また、Ungar(2018)はストレスの多い環境下で人々、組織、またエコ・システムなどが平衡状態を維持するために必要な資源を保護していくシステムの、相互依存的、相互作用的な連鎖の過程としてのレジリエンスには7つの原則(表2参照)があると述べている。

社会生態システムにおいて、人、コミュニティ、経済、社会、文化といった社会的領域は生態系に大きな影響力があるが、あくまでも生態系の一部であるという位置づけである(Folke, Biggs, and Norstrom et al 2016)。社会生態レジリエンスは、攪乱状態に陥っても、それらを乗り越えるのではなく上手に向き合いながら、時には包み込みながら次の段階へと進んでいく過程において出現する。「攪乱」は心をかき乱されるほどの困難な出来事のことをいう。しかし、ここでいう「攪乱」は新しい事を始めたり、更なる成長を促進したり、新たな気付きを与えてくれる機会を得られる可能性を秘めている(Folke 2006)。特性や役割に基づいた関係性には「自由」や「平等」という概念はすでに内在化されている(Bookchin 2005: 110)。それに対し、ヒエラルキー構造による力関係に基づいた関係性は社会関係の矛盾や力の不均衡を生み出し、社会構造上の問題の要因となる可能性がある。社会生態レジリエンスの概念枠組みでは、個人の力の及ばないような環境下であっても、攪乱状態に直面する前と異なる別の枠組みにより平衡状態が保たれ、それに伴い個人やその家族、学校、そして地域などといったあらゆるシステム間の関係性は変容すると考えられる。

表2 : Ungarによる7つのレジリエンスの原則

1	原則1 : レジリエンスは逆境という状況下で出現する。
	レジリエンスはストレス曝露や心の動揺を経験した後、平衡状態に戻ることをいう。
2	原則2 : レジリエンスとは過程そのものである。 逆境下においてシステムが持続可能となるための過程は「持続性、抵抗、立ち直り、適応、変容」の5つである。
	<p>1, 持続性 持続性とは内的、外的ストレス要因がシステムに変化を要求しても安定した機能を維持することをいう。持続性は現状を維持する能力と攪乱からシステム自体を守る同時発生的システムの能力である。</p> <p>2, 抵抗 抵抗とはシステムが内的、外的なストレス要因により脆弱の危機にあり新しい行動レジームへの移行を防ぐために積極的に資源を活用する過程のことをいう。</p> <p>3, 立ち直り 新しい行動レジームが以前の状態を志向していたとしても、個人や組織が立ち直るためには再構築、修復、適応という複雑な過程を経て結果的に新しいレジームへ移行することになる。つまり、攪乱前とは別の「システム」になる。</p> <p>4, 適応 適応とはシステムが損傷を受けた後、新しい方法を習得しシステム自体に順応させていく過程のことである。</p> <p>5, 変容 レジリエンスのシステムの変容過程は順応能力としての等結果性（過程はいくつかあるがたどる結果はひとつ）と予測不能な変容の形としての多面的結果性（たくさんの異なる過程から複数の望ましい結果を得る）をたどる。</p>
3	原則3 : トレードオフ（妥協点）。
	あるシステムのレジリエンスが他のシステムのレジリエンスに恩恵をもたらすとしても、境界線の内側の環境における新しい資源へのアクセス可能性を限定的なものとする資源獲得のための能力を同時に高めていく過程や力動的な競争は、あるレジリエンスが他のシステムに否定的な効果をもたらす可能性がある。
4	原則4 : レジリエントなシステムは開放的、力動的、複雑なものである。
	開放的であることは外的脅威により脆弱性をもたらすがレジリエンスを促進するためにはシステムは新しい情報に開放的である必要がある。ストレス要因はシステム内、または同時発生的システムに起因するが、それらを調整する資源は基本的に多くの異なる要因を含む複雑で相互的な関係性の結果である。
5	原則5 : レジリエントなシステムは連結性を促進する。
	連結性とは危機の際のシステムの構成要素同士が相互的な働きかけを行うことをいう。システム同士のネットワークが良好であれば、システムはより複雑な問題を解決することができる。関係性が社会的、物理的なシステムの行動レジームに影響を与えるような制約に順応したり達成すべき課題と適合する場合に連結性は効果的に作用する。
6	原則6 : レジリエントなシステムは実験と学習を行う。
	新しい解決方法を実験する機会や順応における将来的な効果を学習する機会があれば、システムはよりレジリエントになる。連結性は新しい経験を奨励、又は制限することで実験や学習の機会を形成する。
7	原則7 : レジリエントなシステムには多様性、冗長性、参加が含まれる。
	システムに多様性があれば動揺に対する脆弱性は弱くなり、そのシステムはよりレジリエントになる。レジリエントなシステムでは余剰とされるものが危機が起きた後に対処すべき課題に取り組む能力を保持することに役立つ。参加意識の高い様々なシステムの人々が課題に対する解決方法をより実用的なものにすることで、人と社会環境の関係性をより持続可能なものにできる。

出典 : (Ungar 2018)

## Ⅸ 考察

本研究によって、以下のとおりに整理した。あらゆるシステムは相互的、互惠的關係に基づく多様なネットワークを形成している。それゆえに、あるシステムのリジリエンスが変化するとそれらと関連するすべてのシステムのリジリエンスに影響を与えることになるという大前提である。程度に差はあるものの、心理学的側面、地域的側面、社会生態学的側面におけるリジリエンス理論は人と社会環境の相互作用に関する構成概念について説明している(Ungar 2018)。

また、Masten(2018)のシステム理論を基盤としたリジリエンスは「あらゆるシステム間の活発な相互作用の過程において現れるシステムとしての順応能力」であり、Ungar, Connelly and Liebenberg et al(2017)は社会生態リジリエンスを「人々が彼ら自身の幸福や健康を維持するための心理的、社会的、文化的、物的資源を探し出すことができる能力であるとともに、それらが文化的に意味のある方法で提供されるように個別的、集団的に交渉することのできる能力」と定義づけている。

社会生態学理論を整理することで、特権、権威、権力などといった社会構造上の力関係に左右されるヒエラルキー構造から生じる力による支配関係(Bookchin 2005)は社会関係の不調和を生み出し、社会環境との不調和から生じる問題への適応を難しくすることから攪乱状態を招く可能性があることがわかった。個人、その家族、学校、地域などといったあらゆるシステム間の関係性は、個人の力が及ばない社会的な要因又は社会構造上の問題により、彼らの意に沿わない形で、生活の質を害する方向に作用するか、関係性の働き自体がぜい弱化することもある。その過程の中で人々は「生きづらさ」を感じるのではないか。一方で、人々はそこに存在し続けるために、彼らを取り巻く関係性のネットワークにおいて平衡状態を維持する必要がある。

そのために、生物的、心理的、社会的、その他環境的要因への包括的なアプローチが必要となる。社会生態リジリエンスとは、社会構造上の問題が背景にある困難な状況に対峙しつつ、その中で彼らが属するネットワークとの連携を保ち、互いに学びを深め、成長を促進させることで常に変わりゆく社会環境への適応を試みていく過程ではないだろうか。

日常生活の中で見過ごされがちな些細な出来事であっても人々に予期せぬ影響を与え予想もしない結果を生み出すことがある(Gilligan 2017: 446)。リジリエンスの概念枠組みはこれらの過程をシステム間の相互作用と明確にすることができる。Masten(2001)もリジリエンスは希少で特別な性質ではなく、家族や友人、地域などとの日常的な関わりの中にあると述べている。これを社会生態リジリエンスの枠組みでは、それらが保護的に作用することで人々は逆境に直面しても、そこから気づきや学びを得ながら変容していくことができると考えられる。人々やその家族、地域は逆境を克服するための本質的な能力を備えている(Shapiro 2015)。言い換えれば、逆境の背景にある社会的不平等や不条理と向き合い対応していくことができることである。心を乱されるような難しい状況に直面した際にリジリエンスという現象が出現したとき、それは「逆境からの回復」を意味するというよりはむしろ、逆境と上手に向き合う過程において人と社会環境のより良い適応に向けた「予測不可能だが、力動的で、包括的な変容過程」なのである。そして、それは、ソーシャルワーク実践理論、特に生態学的(エコロジカル)アプローチにおける人と社会環境との循環的な相互作用に関係づけることで、関係性が持つ働きをより全体論的に捉えることができ、人と社会環境のより良い適応への道筋がより明確なものになるのではないだろうか。

## X 今回の研究の限界と今後の課題について

本研究では、システム理論と社会生態理論を基盤としたレジリエンスを整理しつつ、社会生態レジリエンスの概念枠組みを社会構造上の問題に引き寄せた概念整理を試みた。その中で、Windle(2010)がレジリエンスの概念研究の整理を通じて実践に関する論文が少ないと指摘した。レジリエンスに関係づけられたソーシャルワークの先行研究の蓄積は十分ではない。そのため、レジリエンスの概念をソーシャルワーク実践理論に引き寄せた検討に課題が残った。

社会生態レジリエンスは、ソーシャルワークと同様に、人と社会環境との相互作用に焦点を置いている。今後の研究において、社会生態レジリエンスの概念枠組みを用いたソーシャルワーク実践理論を検討していくために、ストレングスやエンパワメントといったソーシャルワークの文脈における先行概念との整合性を図る必要があると考える。さらに、実践理論に用いるために、社会生態レジリエンスの枠組みにおける攪乱を経た変容の過程に関する研究を整理することが必要であると考えられる。

## 文 献

- Andreae D. (1996). Systems Theory and Social Work Treatment. In Turner F. J. (Ed.), *Social Work Treatment 4th edition*. New York, NY: The Free Press.
- Bookchin, M. (2005). *The Ecology of Freedom The emergence and dissolution of hierarchy*. Oakland, CA: AK Press.
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The Ecology of Human Development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Capra, F., Luisi, P.L. (2014). *The Systems View of Life*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Cumming, G. S. (2011). *Spatial Resilience in Social – Ecological Systems*. Springer Science + Business.
- Davis, L.E. (2014). Have we gone too far with resiliency? [Guest editorial]. *Social Work Research*, 38, 5-6.
- Folke, C. (2006). Resilience: The emergence of a perspective for social-ecological systems analyses, *Global Environmental Change*, 16, 253-267.
- Folke, C., Biggs R., Norstrom A. V., et al. (2016). Social-ecological resilience and biosphere-based sustainability science, *Ecology and Society*, 21(3):41.
- Fraser, Mark W., Richman Jack M., Galinsky Maeda J. (1999). Risk, protection, and resilience: Toward a conceptual framework for social work practice, *Social Work Research*, 23(3)131-143.
- Gilgun, J. F. (1996a). Human development and adversity in ecological perspective, Part 1: A conceptual framework. *Families in Society*, 77, 395-402.
- Gilgun, J. F. (1996b). Human development and adversity in ecological perspective, Part 2: Three patterns. *Families in Society*, 77, 459-476.
- Gilligan, R. (2017). Resilience Theory and Social Work Practice. In Turner F. J. (Ed.), *Social Work Treatment 6th edition*. New York, NY: Oxford University Press.
- Gitterman, A. & Germain, C.B. (2008). *The Life Model of Social Work Practice 3rd edition*. New York, NY: Columbia University Press.
- Greene, R. R., Galambos, C., Lee, Y. (2003). Resilience Theory: Theoretical and Professional Conceptualizations, *Journal of Human Behavior in the Social Environment* 8(4)75-91.

- Greene, R. R. (2007). Risk and Resiliency Theory: A Social Work Perspective. In Greene, R. R. (Ed.) *Human Behavior Theory & Social Work Practice 3rd edition*. New Brunswick, NJ: Aldine Transaction.
- Greene, R., R. (2008). *Human Behavior Theory & Social Work Practice 3rd edition*. New Brunswick, NJ: Transaction Publishers.
- Holling, C. S. (1973). Resilience and stability of ecological systems, *Annual Review of Ecology and Systematics* 4:1-23.
- Holling, C. S. (2004). From Complex Regions to Complex Worlds, *Ecology and Society* 9(1):11.
- 井俣経子(2017)「心のレジリエンスを測定する」『Re : Building maintenance & management』 38(4)48-51.
- Lappin, J. (1988). Family Therapy: A Structural Approach. In R. A. Dorfman (Ed.), *Paradigms of Clinical Social Work*. New York, NY: Brunner-Routledge.
- Masten, A. S. (2001). Ordinary Magic, *American Psychologist* 56(3)227-238.
- Masten, A. S. (2015). Pathways to Integrated Resilience Science, *Psychological Inquiry*, 26, 187-196.
- Masten, A.S., & Cicchetti, D. (2016). Resilience in development: Progress and transformation. In D. Cicchetti (Ed.), *Developmental psychopathology* (3rd ed., Vol. 4, pp.271-333). New York, NY: Wiley.
- Masten, A. S. (2018). Resilience Theory and Research on Children and Families: Past, Present, and Promise. *Journal of Family Theory & Review*, 10, 12-31.
- Mattaini, M. A. & Lowery, C.T. (2007). *Foundation of social work practice: a graduate text 4th ed*. NASW Press.
- Mattaini, M.A. (2008). Ecosystems Theory. In K. M. Sowers & C. N. Dulmus (Ed.), *The comprehensive handbook of social work and social welfare*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- Meyer, C. H. (1988). The Eco-Systems Perspective. In R. A. Dorfman (Ed.), *Paradigms of Clinical Social Work*. New York, NY: Brunner-Routledge.
- 尾野明美(2017)「障害のある子どもをもつ母親の子育てレジリエンス」『教育と医学』 65(11), 34-41.
- Pangallo, A., Zibarras, L., & Lewis, R., et al. (2015). Resilience Through the Lens of Interactionism: A Systematic Review. *Psychological Assessment*, 27(1) 1-20
- Richardson, G. E. (2002). The Metatheory of Resilience and Resiliency, *Journal of Clinical Psychology*, 58(3) 307-321.
- Shapiro, V. B. (2015). Resilience: We Not Gone Far Enough? A Response to Larry E. Davis [Guest editorial]. *Social Work Research*, 39, 7-10.
- 徳永豊(2017)「子どもの育ちと環境、レジリエンス」『教育と医学』 65(11), 4-10.
- 鈴木浩太・小林朋佳・稲垣真澄(2015)「発達障害児・者をもつ保護者への支援とレジリエンス」『精神保健研究』 61, 57-60.
- Ungar, M., Connelly, G., Liebenberg, L., et al. (2017). How Schools Enhance the Development of Young People's Resilience, *Social Indicators Research* 145(2)615-627.
- Ungar, M. (2018). Systemic resilience: principles and processes for a science of change in contexts of adversity. *Ecology and Society*, 23(4):34
- Ungar, M. (2021). *Working with Children and Youth with Complex Needs*, New York, NY: Routledge.

- von Bertalanffy, L. (1968). *General system theory: Foundation, development, application*. New York, NY: Braziller.
- 涌水理恵(2020)「発達障害のある子どもを養育する家族のレジリエンス」『厚生指標』67(3), 6-12.
- Walker, B. & Salt, D. (2006). *Resilience Thinking: Sustaining Ecosystems And People in a Changing World*, Washington DC: Island Press. (=2020, 黒川耕大訳『レジリエンス思考 変わりゆく環境と生きる』みすず書房.)
- Walsh, F. (2016). *Strengthening Family Resilience 3<sup>rd</sup> Edition*, New York, NY: The Guilford Press.
- Werner, E. E. (1989). HIGH-RISK CHILDREN IN YOUNG ADULTHOOD: A Longitudinal Study from Birth to 32 Years, *American Journal of Orthopsychiatry* 59(1)72-81.
- Windle, G. (2011). What is Resilience? A review and concept analysis, *Reviews in Clinical Gerontology* 21, 152-169.